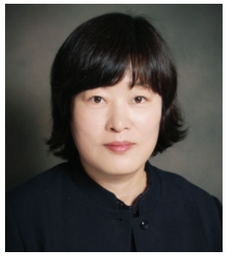


ワセダ日本語学院の歩みと日本留学事情の変貌

ワセダ日本語学院　院長
金（キム）　文子（ムンジャ）

ワセダ日本語学院の設立

ワセダ日本語学院は１９９７年に設立されました。１９９６年に日本留学を終え帰国した私は今の日本語学校ではなく、日本文化センターという文化施設を釜山の海雲台に作りました。早稲田大学第一文学部で文学、同大学院文学研究科で映画を専攻した私は、所蔵していた本とビデオを利用して広く日本文化を紹介したいと思い、本やビデオの貸し出し、映画上映や日本文化を紹介する講義などを始めました。

当時、近所に住んでいた中学3年生の何人かが日本のアニメを見に来てくれましたが、アニメだけではなく日本文化にも興味があるから日本語を教えてほしいと依頼されました。彼らの要望にこたえたのがワセダ日本語学院の始まりです。

その時の中学3年生の4人が、まさにワセダ日本語学院の初めての留学生となりました。当時、日本の大学に留学するためには日本にある日本語学校で1年か2年間勉強して、日本で大学の入学試験を受験するのが一般的でしたが、韓国の高校3年生が、制服を着て入学試験をわざわざ受けに来たことに留学生の面接試験を担当した教授もびっくりしたそうです。

今もそうですが、当時韓国の大学受験事情は大変厳しくて、高校では韓国の大学の受験勉強をしながら日本の大学の入学試験も受験するのは、きわめて大変なことでしたが、その中学生たちは、日本で勉強したい願望が非常に強かったので、両方を乗り越えることができたと思います。今は4人とも日本の大学を卒業して、日本の企業に就職したり、アメリカの大学院に進んで勉強を続けたりしています。

留学クラス

ワセダ日本語学院では高校1年の時に入学して、留学クラスは毎日4時間態勢で勉強をしています。日本留学試験の対策はもちろん、小論文、速読、講読、デイスカッション、プレゼンテーション、日本の社会経済問題のレポートを書かせる授業、朝日新聞、日本経済新聞を読んで討論をさせる授業、面接などをしています。

担当の先生は、日本留学の経験のある韓国人の先生と日本人の先生がペアを組んで、学生のニーズに合わせて、大学選びや専攻の相談をしています。

特に力を入れている授業は日本留学試験の日本語の「記述」です。日本留学試験の記述の400字がベースになっていないと、大学の小論文が書けないからです。小論文が書けるまでは漢字や語彙を増やすだけでなく、政治、経済、文化の各分野の本を読まなければならないです。これは1、2年の勉強ではなかなかやりこなせない分量なので、普段から読書指導（1カ月に2冊）をしていますが、速読の勉強も含め、世界の流れを理解できるように日本の新聞などを毎日読む習慣も必要です。

現在は、毎年約１００人ぐらいの高校3年生がワセダ日本語学院を卒業して、日本の大学に進学しています。また、釜山で1カ所だけでスタートしたワセダ日本語学院も釜山に3カ所、ソウルに5カ所と拡充することができました。

日本へ渡航しての受験

おかげさまで、学校の数は増え、卒業生も続々順調に日本に留学しています。しかしながら、10年前も今も韓国の高校3年生が日本の大学を受験するのは大変です。まず、受験の時、学校を休んで日本まで直接渡航しなければならない点があげられます。やはり、当然ながら韓国の高校は、学生を韓国の大学へ進学させることを目標としているので、学期中に学校を休んで日本に行くとしたら、当該学生は「欠席」処理になるのはもちろん、なかなか事情を理解してもらえないことです。

また、親御さんにも飛行機に乗って外国に子供を行かせるのが初めての方もいらっしゃるので、大変不安に思うわけです。

しかし、何年か前から日本留学試験を利用した「渡日前入学許可」が実施されたり、日本の大学の入試広報課や国際交流課の先生方が直接韓国までいらしてAO入試を行うようになってからは、このような不安は薄められました。とはいっても、残念ながら、まだまだ全部の大学が渡日前入学許可や韓国での入試を実施しているわけではないので、多様な学生たちのニーズには応じかねるところがあります。

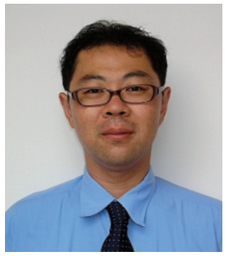
日本の大学のパンフレット

最近は、日本の大学に電子メールで入試要項などを要求すると、すぐに送ってもらえることが増えましたが、まだ韓国語のパンフレットを出している大学は少ないです。学生は日本語が読めるので問題はないですが、親御さんたちは日本語が読めないので、お子さんが入学を希望する日本の大学について詳細が分からない人もいます。ですから、日本の大学には、ぜひとも韓国語のパンフレットも作成していただきたいです。

最後に

今年は9月初めに釜山とソウルでＪＡＳＳＯなどが主催する日本留学博覧会（フェア）が開催され、去年に比べて2倍以上の人が集まり、大繁盛でしたが、もっと韓国からの日本留学希望者は増えると見込まれています。実際、韓国でよく名前が知られている大学以外にも日本には優れた大学がたくさんありますので、そのような大学がもっと知名度があがるように日本留学博覧会以外にも、ウエブサイト上での紹介などを充実した内容に改善してほしいと思っています。

ワセダ日本語学院では、今年は98名の高校生が日本の大学に進学しましたが、現在、日本の大学を目指して勉強している高校1年、2年の学生はますます増えているし、希望する専攻も、大学も非常に多様化しています。当然、日本に渡航しなくても日本留学試験を活用した「渡日前入学許可」を実施したり、直接、韓国で入試を行う大学の方が好まれます。これから益々進展する国際化社会のためにも、ぜひとも日本の大学にはさらに門戸を開いていただき、もっと多くの留学生を受け入れていただくことを願ってやみません。



日本の大学へ希望すること

ドンズー日本語学校
校長秘書
伊藤晴彦

ドンズー日本語学校

学校紹介

私達ドンズー日本語学校は、ベトナム・ホーチミン市内で最大規模の日本語学校です。学生は約5000人おります。「ベトナムの国づくり」を目指し、ベトナム国内より将来を担うであろう優秀な学生を選抜し、日本へ留学生を送り出すプロジェクトは、1992年から現在まで約580人になります。プロジェクト開始当初は、ノウハウがわからず多くの学生を送ることができなかったものの、ここ数年は、毎年150名くらいの学生を送り出しています。

ドンズー日本語学校は、1991年4月に設立されました。ベトナムではドイモイ政策が進み、経済及び工業が急速に発展しております。その中で、特に日本との関係は目を見張るものがあり、日本語の必要性が注目されています。その中において、「日本語話者の人材育成」、「日本語を通してベトナムとの文化交流」、「日本への留学生派遣」という3つのテーマを掲げて学校を運営しています。その中で、最も力を入れているのが、「日本への留学生派遣」です。

東遊（ドンズー）運動

ベトナムにおいて日本へ留学生を派遣する動きは、今に始まったことではありません。20世紀初頭に、若い指導者を日本で育てようという「東遊（ドンズー）運動」が起こりました。当時、日露戦争でロシアに勝った日本は、ベトナムにとって輝かしい民族独立のシンボルだったのです。

しかし、この東遊運動は決して成功したとは言えない内容でした。それから約1世紀の時を越え、東遊運動の志を受け継ぎ設立された学校が、私達のドンズー日本語学校です。

留学生クラス

現在、留学生クラス（留学志望者のクラス）は、2006年に設立した新校舎にて集中的に行っております。この校舎では、留学生及び研修生のみの授業しか行っておらず、一般クラスとは隔離して授業を行っております。研修生クラスは日本語全般の授業を行い、留学生クラスは日本語の授業に加え、数学・物理・化学といった科目も教育しております。テキストは日本の高等学校のテキストを使用しております。また、授業は全て日本語で行っています。日本語以外の授業に関しては、将来、日本国内の大学での講義を想定し、できるかぎり日本語のみでの授業に取り組んでいます。

日本留学の不安

留学生にとって、渡航前の最も不安なことは日本での生活です。もちろん勉学に対する不安もあるのですが、まず生活です。生活あっての勉学です。特に金銭面の不安は、学生に大きくのしかかっています。ベトナムの物価は日本の約8分の1です。いくら裕福な家庭でも、日本での生活は苦労が強いられます。従って、日本へ留学した学生は、アルバイトをしながら学費と生活費を稼ぎ勉強しています。出稼ぎに来ているのではないから、アルバイトは程ほどにという日本側の思いもあるでしょうが、その一方で、入学金や授業料の支払い等、渡航してすぐに数十万円の借金を抱えてしまったら、勉強どころの話ではありません。返済の目処も立たず、祖国での年収分の借金を一瞬にして背負ってしまうのです。そのため、入学金の免除や分割化を認めていただきたいです。特に、入学時の負担を軽減していただきたいと思います。

留学情報不足

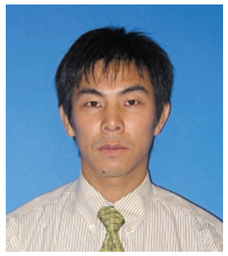
次に、留学に関する情報が少なすぎます。情報収集は主にインターネットで行っていますが、知りたい情報を効率よく検索することができません。例えば、「水力発電について専門に勉強したい」と思った学生がいるとします。どこの大学へ行けば水力発電について勉強できるのか、どこの大学が水力発電に強いのかといったことがわかりません。学生はただ漠然と日本留学試験で良い点数を取って良い大学に行くしかないという感じになってしまいます。学生達には、勉強したい専門分野があり、技術が進んでいる日本へ留学したいと思うわけですが、どこの大学へ進学するのかといった具体的な目標が立てられません。

最後に

最後に、当校では一度日本国内の日本語学校へ就学生として送り、その日本語学校から日本留学試験を受験させ進学させています。日本で日本語を勉強できるというメリットはあるのですが、一度初級の学習をしたのにも拘わらず、もう一度初級の勉強から始めることが多く、少々効率悪く感じています。直接大学へ留学させたり、もしくは大学院へ進学させることが出来ればいいのですが、海外から直接留学する場合、多くの大学等は日本語能力試験2級取得を条件として掲げています。日本語能力試験は12月にしか実施されません。2級取得の実力があるにも拘わらず落ちてしまった場合や、個人の事情により受験できない場合、もう1年待って受験しなければいけないというのは、非常に不利であると思います。大学側からホーチミンへお越しいただいて、留学生選抜試験を行うなどの工夫を積極的にしていただくことはできないでしょうか。

あるいは、日本留学試験の成績で判定いただく「渡日前入学許可」をお願いできればありがたいかぎりです。

以上3点について、日本の大学側にもう少し柔軟に対応していただければ、優秀な学生を今よりも多く送ることができるし、大学側としても学生を集め易いのではないかと感じております。



「渡日前入学許可」の受験を考える

帝京マレーシア日本語学院
副校長・教務主任
炭谷　憲一

帝京マレーシア
日本語学院

学校紹介

当学院は日本とマレーシアの友好促進を目的に、帝京大学グループがクアラルンプール日本人会の協力を得て1997年に設立しました。校舎はクアラルンプール日本人会内にある元日本人学校の施設を使用しています。2002年からはマレーシア政府派遣留学生（大学学部）の留学前準備教育プログラムの委託を受け、2003年には文部科学省「日本留学のための準備教育課程」の指定を受けました。日本語のほか、数学、理科、社会、英語の授業を行っています。学生数は私費生60名、政府派遣留学生65名の計125名（2007年4月現在）です。私費生のコースは12ヵ月コースと18ヵ月コースの2つがあります。

留学実績ですが、9年間で99名の私費留学生と79名の政府派遣留学生が日本の大学、短期大学、各種学校に進学しています。海外にあるということで、日本語力におけるハンディキャップは避けられませんが、その分日本語の授業、特に初級段階において日本国内の学校より大幅に長い時間をとり、コミュニケーション力を養成するカリキュラムを組んでいます。そのおかげか、進学した大学関係者の方々から「予想以上に日本語が良くできる」との声をよくいただきます。

渡日前入学許可の利用について

当学院の渡日前入学許可の利用実績は、出願数44、合格5、入学4です。大変魅力的な制度ではありますが、いまのところ十分に活用しているとは言えません。
当学院の学生がこの制度を利用する場合、
A 第一志望として出願する。他大学と併願しない。
B 第二、第三志望として出願する。他大学と併願する。
の2つのケースが考えられます。Aのケースはこれまでに2名が受験し2名とも合格、入学しています。いずれも文科系志望の女性で、私立大学への出願です。Bのケースは、42名が受験し合格が3名、入学が2名です。すべて国公立大理系学部への出願です。こちらは不合格が多くなっていますが、その後渡日して他の国公立大学を受験し、合格するといったケースも多くあります。

このようなこともあってか、我々の間では国公立大学の「渡日前」はなかなか合格できない、といったイメージができつつあります。これはあくまで推測なのですが、国公立大学の「渡日前」はその利便性ゆえに競争率が高くなり、合格ラインも上がっているのではないかという気がしています。大学側としては受験生の顔が見えず、日本留学試験の点数のみで判断するしかないため、そのぶん合格基準を若干高めに設定するということもあるのかもしれません。したがって、当学院では国公立大学志望の学生に「渡日前」一本で、という指導は行っていません。本制度を利用している大学が決して多くない今の現状では、出願が集中し難関となっている（であろう）「渡日前」を狙うよりは、お金がかかって気の毒なのですが、直接日本で試験を受けるほうが良いと勧めています。

そのほか、「渡日前」利用が増えない理由の一つに、出願時期と入学手続時期の問題があります。「渡日前」の出願時期と入学手続時期は、一般に国内受験に比べかなり早くなっています。私立大学は特にその傾向が強いようです。しかし、当学院では成績上位者ほど、日本留学試験の結果発表（12月下旬）を待って受験校を決定したい、それも国公立大学を受験したい、という傾向が強いです。そして国公立大学を複数受験する場合、その合格発表がすべて終わるのは3月に入ってからです。たとえ先に渡日前入学許可をもらっていたとしても、第一志望でない限り、それ以前に入学手続をするのは非常に難しい決断となってしまいます。

日本の大学への要望

海外にいる者にとって、日本の国公立大学は大変受けにくい構造になっています。まず、出願書類を取り寄せるにも国外からでは無理です。「日本の切手」を貼った封筒で、「日本国内の住所」から取り寄せなければなりません。出願の際も同様です。また受験料、入学金等の納入金も「日本国内の郵便局で払う」となっているところがほとんどです。なかには「窓口持参」というところもありました。「渡日前」も例外ではありません。こういった手続は日本国内に知人がいないと大変です。当学院ではやむなく学生に代わって学校側が日本国内に代理人を置き、手続の代行をお願いしている状況です。海外からの出願については、各種納付金の支払い方法を銀行振り込みにするなどの措置をとっていただけると非常に助かります。

「渡日前入学許可」はできる限り利用させたいと考えています。そのためにも、この制度がより多くの大学、特に国公立大学で多く実施されることを期待します。私立大学に留学可能な学生は比較的裕福で、受験のための渡航費用は大きな負担ではありません。本当にこの制度が必要なのは、経済的な事情から国公立以外の留学は無理な学生の方だといえます。こうした事情をふまえ、「渡日前入学許可」が受験する側にとってより利用しやすいシステムになっていくことを希望します。

日本とモンゴルの明日を築く人材育成

新モンゴル高等学校校長
Janchiv（ジャンチブ） Galbadrakh（ガルバドラッハ）

新モンゴル高等学校

学校紹介

初めまして、新モンゴル高等学校・校長、ジャンチブ・ガルバドラッハと申します。現在、本職と同時に東北大学の大学院教育研究科博士課程において、「モンゴルにおける高等学校カリキュラムの開発」というテーマで博士論文を執筆しています。

新モンゴル高校は２０００年秋、数多くの日本人有志の方々のご支援により設立にいたりました。モンゴル初の３年制日本式高校として開校し、５期の卒業生を輩出しています。社会体制移行に伴う混乱期にあるモンゴルにおいて、国の自立・発展を支える若者たちの育成が急務となっています。「体制移行後の新たなモンゴルの未来を担う人材育成」を目標とし、学校名を「新モンゴル」と名付けました。卒業生が日本を始め、海外の大学へと羽ばたけるよう、従来の２年制の課程を３年制に改め、国際水準のカリキュラムを取り入れています。

留学実績等

在校生たちは、区・市・全国レベルにおいて行われる各教科オリンピックにも積極的に参加し、優秀な成績を収めています。モンゴル国代表として、２００４・０５年の国際情報大会に2名、２００５・０６年の国際物理大会に1名、２００７年の国際化学大会に１名が出場しています。卒業後の進路として、日本以外にもアメリカやロシア、中国、トルコなどへの留学の実績もあります。一昨年度は、１名がマサチューセッツ工科大学に４年間の奨学金付きで合格しました。

留学先は日本が最も多く、国費・私費留学を合わせ、現在５９名が学んでいます。東京・大阪・一橋・横浜国立大学に各１名、千葉大学に8名、信州大学に7名など、北は弘前大学から南は高知大学まで、１８の大学に在籍しています。また、東京国際大学や東北福祉大学などのように本校と提携を結び、本校生の受入れを積極的に認めていただいている教育機関もあります。

これまで、モンゴルの高校課程までの就学年数は、合計１０年間であったため、高校課程を３年制にした本校でも、１１年にしか達しません。一方、日本留学には１２年間の就学義務があるため、卒業時点では年数が及びません。そのため、本校を６月に卒業した後、９月から国内大学に進学した上で約半年間学び、その末、日本への受験に臨みます。就学年数１１年半での受験資格を認めていただくことは簡単ではありませんでしたが、現在では、約２０の大学から認めていただいています。

日本へ渡航しての受験

受験生は毎年、モンゴル国内で受けた日本留学試験の成績に応じて選抜されます。大学との受験手続きを経て、日本へと渡ります。渡日前入学許可が無いため、必ず日本の大学へと受験しに行かなければなりません。合格率は年々上がり、今年度は、１６名中１５名が合格を果たしました（表参照）。残りの１名は残念ながら不合格でしたが、来年に向けて努力を続けています。合格者の中では、受験した３校全てに4名、2校全てに同じく４名が合格しました。受験した大学に合格することは、もちろん喜ばしいことですが、受験料・交通・宿泊費を捻出しながら合格しても、１つの大学にしか入ることができません。せっかく入学を認めていただいた大学に対して、辞退するなどでご迷惑をおかけし本当に申し訳ありません。

＜私費留学生受験状況＞

	04年度	05年度	06年度	07年度
受験者	8	12	13	16
合格者	6	10	12	15
合格率（%）	75.0	83.3	92.3	93.8

支援機関

卒業生の日本留学が決まった際には、留学費用を支援してくださる奨学金団体が日本国内にあります。NGO「ACA- AQUA」、株式会社「東日本ハウス」、「マブチ国際育英財団」、「安田財団」の４団体です。モンゴルの抱える深刻な社会問題、それらを肌身を通して痛感し、高い問題意識を抱いて懸命に勉学に励む姿が、スポンサーからの評価につながっているのだと考えます。

本校卒業生の日本留学は将来のモンゴルだけではなく、日本の学生に対しても刺激を与え、好影響を与えるものと信じています。

上記のように、合格者に対して奨学金をいただいておりますが、受験の際の渡航・交通・宿泊・受験料などにかかる費用は、各家庭より捻出されています。1か月の平均所得が1万5千円前後という現在のモンゴルにおいて、日本留学を目指すことは困難です。生活の切り詰めや借金などへとつながる深刻な問題となっています。さらに、合格率を高めるために1人あたり2、3校を受験するため、負担が増しています。このような経済的負担を軽減するためにも、「渡日前入学許可」が不可欠であります。

日本語学習の悩み

また、本校は日本語学習に特化した日本語学校であるのではなく、正式な高等学校であるため、卒業時の日本語能力が劣ってしまうことは実情です。生徒の多くは、在学中の３年間で日本語を学習しますが、アカデミック・ジャパニーズの水準に達するのは困難です。そのため、6月に卒業を迎え、8月に日本語サマースクールを実施し、10・11月に日本留学試験対策講習を設けています。年に2度実施されている日本留学試験のうち、11月の試験での成績結果をもとに受験準備をしなければなりません。しかし、渡日前入学許可の申請期間は１０月頃に終わってしまいます。そのため、大学関係者には申請期間の変更のご検討を併せてお願い申し上げます。

国交締結３５周年を迎えた日本とモンゴルは、良好な関係を進展させ、発展的なパートナーシップを築いてきました。資源にも恵まれたモンゴルとの将来へとつながる関係構築、人脈づくりは、日本の国益にもつながります。渡日前入学許可を認めていただくことは、モンゴルだけではなく国際社会における日本の将来においても、重要な第一歩となるのではないでしょうか。渡日前入学許可を１つでも多くの大学において実現していただきたく、関係者の皆様に心よりお願い申し上げます。

日本の大学で学んだ本校の卒業生が、日本の若者と手を取り合いながら、国際社会の明日を築く日が来ることを信じています。